

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652005

研究課題名(和文)自己変容の哲学と対人援助

研究課題名(英文)Philosophy of Self-transformation and Human Aids

研究代表者

中岡 成文(Nakaoka, Narifumi)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：00137358

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：対話を中心とした社会的・自然的過程で生じる個人や集団の存在論的变化(自己変容)に着目し、養生論、高齢者ケア論(尾崎放哉論を含む)、G.バタイユ論を中心に、自己変容・臨床哲学と対人援助との関係を明らかにした。これらは対人援助の哲学的・倫理的基盤に、また現代社会における援助実践に、大きくかつ具体的な示唆を与える。その成果はとりわけ、大阪大学大学院の授業(とくに双方向的形式のそれ)において、臨床倫理事例検討会・倫理カフェにおいて、ALS患者との交流・福祉ものづくりにおいて、公表された。

研究成果の概要(英文)：This research dealt with ontological changes of individuals and groups in the course of social or natural processes including dialogues and successfully clarified the relations between self-transformation or clinical philosophy and human aids with focus upon issues in the field of Yojo thoughts (self health care), caring thoughts with aged people including discussions of Ozaki Hosai, the Japanese Haiku poet, as well as discussions of G. Bataille. These findings might give huge and specific suggestions on philosophical and ethical foundation of human aids as well as on human aids practice in modern society. Its results have been made public in lectures and seminars in the Ph.D course of Osaka University, in clinical ethical review meetings and ethics cafes at medical facilities, and at meetings with people with ALS.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：自己変容 対人援助 臨床哲学 尾崎放哉 養生 高齢者ケア

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで、「新しい公共的対話モデルの有効性の検討」(基盤研究(B)、平成16-19年度)など、日本における「公共的対話」を軌道に乗せるための研究を行い、2002年からは先端医療や科学技術におけるコミュニケーションの問題にコミットを開始し、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」(拠点リーダー・鷲田清一)などにおいて蓄積されたその知見は、2005年4月発足の大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(研究代表者が初代センター長に就任)の設立に、とりわけその臨床セクション(医療福祉)と科学技術セクションの充実に貢献した。

(2) しかるに、公共的対話やコミュニケーションの回路のデザイン・制度設計の問題にコミットするなかで明確になったのは、医療者と患者、研究者・行政と一般市民が対話することで、当初は予想できなかったような当事者の自己変容と相互理解が現実が生じることであった。

(3) 応募者はその経験と知見を踏まえて、自己変容の存在論的側面と社会哲学的側面を併せて探求する「自己変容の哲学」を構想し、2007年度以降本務校においてこれを主題とする講義を毎年開講するとともに、その成果を論文にまとめた。同時に、自己変容論の中核をなす5つの「関係性」モデルによって、臨床哲学研究室の「安楽」分科会(医療福祉分野)の議論を理論的にリードし、その成果は同年度の同分科会ワーキングペーパーにまとめられ、大阪大学大学院文学研究科・臨床哲学研究室の紀要『臨床哲学』で発表された。

(4) 研究分担者・西川勝は、看護および高齢者介護の専門家として長年従事してきた臨床経験を臨床哲学の観点から理論化し、『ためらいの看護』(岩波書店)を上梓して、すぐれた対人援助では、被援助者が自己変容するだけではなく、援助者の変容も加速され、援助関係の枠組みそのものが変わり、ひいては社会も変わることを明らかにした。西川はそれをケアの創造性と名づけた。

## 2. 研究の目的

(1) 現代社会における対人援助では、従来以上に当事者間の対話・コミュニケーションの意義と役割が大きく、哲学・倫理学の立場からその掘り下げた研究に積極的に貢献することが期待された。

(2) 本研究では、とくに、対話の過程で生じるであろう個人や集団の存在論的変化(自己変容)に着目して理論的分析を進め、

(3) その結果得られた知見・成果をすぐれた対人援助の基本的理念や基本的態度にフィードバックすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者・中岡が比較的(哲学・倫理学の)理論面中心、研究分担者・西川が比較的(対人援助の)実践面中心と大きくは重点を別にして分担するものの、代表者にもALS患者や難聴の当事者・援助者とかかわる実践の蓄積があり、また分担者にも長年臨床哲学の主要メンバーの一人として理論構築に携わった実績がある。研究方法は研究の進展とともに当初の計画より数多くなり、おおむね次の7つを軸として構成されることとなった。

(1) 文献研究(存在論、生命・医療倫理、社会学、心理学、社会福祉学、デリダやバタイユの思想等)

(2) 自己変容の月例勉強会

これは、代表者・中岡を中心とする公衆衛生問題研究会(貝原益軒の養生論やフーコーの自己ケア論など)、分担者・西川の研究発表会(尾崎放哉および「お遍路さん」をめぐるケアと自己変容を論じた)、あるいは研究協力者・田口了麻を中心とするJ.デリダおよびG.バタイユの勉強会(人間学的自己変容論を取り扱った)などの形をとって実施された。

(3) 「自己変容の哲学」講義における双方向的対話(中岡)

大阪大学大学院文学研究科の授業「自己変容の哲学」(毎週1回開講)において、受講者は代表者・中岡の著書『試練と成熟ー自己変容の哲学』を各部分毎に読んで、そこに叙述された自己変容モデルに対する理解を深めるとともに、各自の経験と思索に基づく自己変容に関する理論的・実践的レスポンスを発表した。それにより、自己変容の哲学的・倫理的モデルが双方向的により完成度を高めると同時に、学生・市民(受講を許された)の間での自己変容モデルの受容が促進された。

(4) 医療施設(大阪市・淀川キリスト教病院)での臨床倫理事例検討会・倫理カフェ開催(進行役とその成果の分析、ならびにがん専門看護師養成に向けてのプログラム作成へのフィードバック(中岡))

(5) 福祉ものづくりの観点からする和歌山・大阪のALS患者との交流や意見交換(立正大学・湘南工科大学の研究者・学生などとの哲学カフェを含む)(中岡)

(6) いわゆる「お遍路さん」の実践と実地調査(四国八十八か所の一部)を通しての、自己および他者への身体的・生活態度的ケアと自己変容の分析(西川)

(7) 俳人・尾崎放哉をモデルとして選び、晩年の彼が小豆島の地元民との接触と彼らによる「ケア」を通じて経験した自己変容の分析と、そのケア実践理論へのフィードバック(西川)

代表者・中岡は全体を総括し、自己変容の哲学の観点から理論的基礎をより堅固にするとともに、公共的対話(臨床倫理検討会・倫理カフェを含む)における参加者および進行役の自己変容について分析し、それらを自己変容モデルにまとめた。分担者・西川は「ケアの創造性」の理論構築を主として担当するとともに、福祉現場のスタッフと広く意見交換して、認知症をはじめとするすぐれた対人援助のありかたについてまとめ、それらをもとに代表者の作成した自己変容モデルを検討し、必要な修正を加えた。そのうえで両者が協力して、自己変容の月例勉強会でモデルを随時提示し、参加者と意見交換してモデルをさらに改良した。

#### 4. 研究成果

(1) 文献研究(存在論、生命・医療倫理、社会学、心理学、社会福祉学、デリダやバタイユの思想等)の成果を取りまとめて、代表者・中岡の著書『試練と成熟ー自己変容の哲学』、および分担者・西川の『となりの認知症』と『一人のうらにー尾崎放哉の島へ』を世に問うことができ、また中岡の応用哲学会第5回研究大会ワークショップ「語る倫理学とためらう哲学」での研究発表、さらに協力者・田口のいくつかの学会発表・報告(日本社会学会大会を含む)を生み出すことができた。これらは、わが国でおそらく初めて、「自己変容」というテーマを哲学的・倫理的に解明・深化した形で発表し、しかもそれを対人援助の実践にフィードバックすることを企図したものである。付け加えれば、研究期間を通じて、「自己変容」というキーワードは、少なくとも大阪大学の臨床哲学とその周囲の研究者・一般市民の間では、かなり使用されるようになった(代表者・中岡および分担者・西川の見聞による)。また、協力者・田口の研究交流を通じて、首都圏の若手研究者の間にも、「自己変容」という理論的観点が少しずつ浸透したとの報告があった。

#### (2) 自己変容の月例勉強会

研究期間中に15回(2012年度)、次いで18回(2013年度)開催した。前述のとおり、分担者・西川の研究発表(尾崎放哉および「お遍路さん」をめぐるケアと自己変容)、研究協力者・田口了麻を中心とするJ. デリダおよびG. バタイユについての討論が軸となったが、2012年度4-6月期には公衆衛生についての共同研究を実施し、これは大阪大学医学系研究科公衆衛生教室と

のコラボに発展し、学際的な意見交換を行うことができた(具体的には、同教室主催による中岡の特別講演会「養生論と自己へのケア」に結実)。また、この関連で述べておけば、高齢者ケアへのフィードバックも試みられ、特別養護施設グレイスヴィル舞鶴(舞鶴市)において、中岡と西川が『養生訓』について公開の対話を実施し、同施設職員・入所者・一般市民と意見交換した。

#### (3) 「自己変容の哲学」講義における双方向的対話(中岡)

前述のとおり大阪大学大学院文学研究科の授業「自己変容の哲学」(毎週1回開講)においてきめ細かい双方向的対話が交わされ、自己変容モデルの彫琢と受容が促進された。特筆すべきは、受講者の中に医療者(看護学研究者や歯科医師(複数))が含まれており、医療における対人援助の実践についての報告もなされ、自己変容の観点から突き詰めた意見交換が参加者の間でなされたことである。また、受講者の中には日本でも有数の絵本学の研究者が含まれていたため、それが絵本学研究所(吹田市)における絵本学カフェ「絵本学と哲学のコラボレーション」につながったことにも触れておく。

(4) 医療施設(淀川キリスト教病院)での臨床倫理事例検討会・倫理カフェ(2012年度、2013年度に各6回開催)に進行役として参加し、自己変容の観点からする対人援助の精神をもって議論をファシリテートした(中岡)。その成果は、中岡とともに進行役を務めた研究者・実践家・学生たち(多くは大阪大学大学院文学研究科・臨床哲学の関係者)によっても受容された結果、同病院関係者を中心とする「がん専門看護師養成プログラム」作成に間接的ながら貢献することとなった(中岡)。

(5) 「福祉ものづくり」の観点からする和歌山・大阪のALS患者との交流や意見交換(立正大学・湘南工科大学主催)、とくに夏合宿と春合宿(2012年度各1回、2013年度各1回)に大阪大学大学院文学研究科・臨床哲学研究室として全面的に協力した(中岡および臨床哲学の教員、学生たち)。それにより、難病患者のピアサポートおよび技術的サポートについての知見を多数豊かに獲得することができ、「自己変容と対人援助」という研究課題についての認識を深めると同時に、複数回開催された哲学カフェをサポートすることにより、難病をかかえる人々およびその家族の自己変容について参加学生たちの理解を深めるのに貢献することができた。また、ものづくりにおいて予定された製品イメージと実際の制作過程との関連性が議論されるなかで、(クライアントを念頭におきつつ)制作者・制作イメージの自己変容という出来事の重要性が明らかになり、「自己変

容」理論の学際的深まりに向けて大きな手がかりを得た。その成果の一端は、2013年度の西田哲学会シンポジウム「技術」における提題「生と思考のテクネー」で公表された(会場は、前述した立正大学)。

(6)いわゆる「お遍路さん」の実践と実地調査(四国八十八か所の一部)を2013年度に計3回にわたって行った(西川)。これにより、学生・大学教員を含む「お遍路さん」実践者の自己変容を参与的に観察することができ、自己および他者への身体的・生活態度的ケアと自己変容の分析を進めることができた。

(7)俳人・尾崎放哉が晩年を過ごした小豆島の地域において、2012年度に2回にわたって実地調査・資料調査を行った(西川)。その成果は、自己変容の月例勉強会において口頭発表(「尾崎放哉の小豆島における自己変容ーケアの創造性ー」、2013年2月27日)されたのち、西川の著書『「一人」のうらにー尾崎放哉の島へ』にまとめて公表された。そこには、放哉が地元民から受けた「援助」の特質とそれによる放哉の「自己変容」についての分析と、ケア実践理論へのフィードバックの一端が示されている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

中岡成文、生と思考のテクネー、西田哲学年報、査読有、2014年、印刷中

[学会発表] (計7件)

(1) 中岡成文、大阪大学の〈医学概論〉ー澤瀉久敬の場合、医療人文学研究会、2014年3月4日、大阪大学豊中キャンパスオレンジシヨップ

(2) 中岡成文、〈生ある者〉の相互性へーケアと科学、日本学術会議・看護学分会主催公開シンポジウム「ケアサイエンスの必要性と看護学の役割」、2014年3月1日、日本学術会議講堂

(3) 中岡成文、ケアとは誰の何をケアするのか、保健医療学学会第4回学術集会、2013年12月1日、藍野大学

(4) 中岡成文、生と思考のテクネー、西田哲学会第11回年次大会シンポジウム「技術」、2013年7月20日、立正大学

(5) Narifumi Nakaoka, Self Technology and Clinical Philosophy: Potentials of yojo concepts today, 第4回漢学国際会議、2012年6月22日、中央研究院(台湾)

(6) 中岡成文、くらしの中の哲学ー京都学派のサロンと散歩道、2012年度立命館大阪プロムナードセミナー、2012年6月12日、立命館大阪キャンパス

(7) 中岡成文、養生論と自己へのケア、大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生教室・特別講演会、2012年6月4日、大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生教室

[図書] (計3件)

西川勝、サウダージ・ブックス、「一人」のうらにー尾崎放哉の島へ、2013、224

西川勝、ふねうま舎、となりの認知症、2013、200

中岡成文、大阪大学出版会、試練と成熟ー自己変容の哲学、2012、215

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

中岡成文を中心(チューター)とする「哲学塾」の発足(2014年4月)と継続  
[http://blog.livedoor.jp/tetsugakujuuku\\_5wf8/](http://blog.livedoor.jp/tetsugakujuuku_5wf8/)

中岡成文、「自己変容」の観点による「学生主導型学際連携リーダー育成企画」における特別研究指導、東京工業大学情報生命博士教育院+大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム後援、大阪大学吹田キャンパス

産学連携本部、2014年3月2日

西川勝、中岡成文、書評カフェでのトーク（第23回カライモ学校 書評カフェ「本」について、お話ししましょうー中岡成文さんと西川勝さんを囲んで、古書店 KARAIMO BOOKS、京都市上京区、2014年2月25日  
[https://www.facebook.com/permalink.php?story\\_fbid=1505167343043042&id=164910287028453](https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=1505167343043042&id=164910287028453)

中岡成文、絵本学カフェ「絵本学と哲学のコラボレーション」で講演、絵本学研究所、吹田市、2014年2月3日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中岡 成文 (NAKAOKA NARIFUMI)  
大阪大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：00137358

### (2) 研究分担者

西川 勝 (NISHIKAWA MASARU)  
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・特任教授  
研究者番号：10420423

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：